

常縁原撰『新古今集聞書』の漢詩文引用について

近藤 美奈子

はじめに

東常縁は、宗祇により古今伝授の創始者として喧伝され、それが為もあり、近世の国学者からは不当に排斥もされたが、二条派歌学の正統を伝える歌人として、また歌学者として中世和歌史上に偉大な足跡を残している事は周知の通りである。

『新古今集聞書』は常縁が著した注釈書で、『新古今和歌集』のまとまった注釈書としては最初のものである。抄出歌数は約二百首で決して多くはないが、のち細川幽斎によって四百数十首が増補されて流布し後世の注釈書に多大な影響を与えている。

従来、『新古今和歌集』に限らず常縁の「注釈」と言え
ば、二条冷泉兩派の巨頭堯孝正徹との師承関係から和歌
方面ばかりに関心が集まっていたように思われる。小稿
では、『聞書』に引用されている漢詩文を取り上げて常縁
の「注釈」についての別の一面を探ってみたい。

一

次に掲げるのは、『聞書』に引用されている漢詩文の出
典一覧表である。最上段の数字は『聞書』の通し番号、第
二段目に抄出歌（『新編国歌大観』による『新古今和歌集』
の歌番号を付す）と通し番号を付した引用漢詩文、最下
段に漢詩文の出典を記すものとする。

〔引用漢詩文一覽表〕

〔圖書の 通し番号〕	抄出歌と引用漢詩文	出典
一	<p>みよし野は山も霞て白雪のふりにし里に春はきにけり(一) 1 天不言して四時行</p>	<p>『論語』卷十七・陽貨篇</p>
八	<p>なかめつるけふは昔に成ぬとも軒はの梅は我を忘るな(五二) 2 何方可化身千億一樹梅花一放翁 3 梅歴寒苦発清香</p>	<p>『放翁詩集』(『劍南詩稿』)「梅花絶句」 未詳(杜子美詩云)と引用)</p>
一九	<p>思ひたつ鳥はふるすもたのむらん馴ぬる花の跡の夕暮(一五四) 4 花散在根鳥飯旧巢</p>	<p>未詳</p>
二二	<p>あすからはしかの花そのまれにたに誰かはとはん春のふるさと(二七四) 5 主人心安楽花竹有和意</p>	<p>『山谷詩集』「次韻答斌老病起 獨游東園二首」の(二)</p>
二四	<p>昔思ふ草の庵りのよるの雨に涙なそへそ山ほととぎす(二〇二) ⑥ 蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵裏 7 憶在錦城歌吹海七年夜雨不 8 半夜灯前十年事一時和雨到心頭 9 年老心閑無外事麻衣草坐亦容身</p>	<p>○『白氏文集』卷十七・「廬山草堂夜雨 獨宿寄牛二・李七・庚三十二員外」 ○『和漢朗詠集』「山家」白居易 未詳 『三体詩』卷一「旅懷」杜荀鶴 『三体詩』卷一「答韋丹」僧靈徹</p>

四三	(みわたせは) なかむれば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮(三六三) 10 こと葉をたくみにし色をよくする	『論語』卷一・学而篇
四六	月みれば思ひそあへぬ山たかみいつれの年の雪にかあるらむ(三八八) ⑪ 天山不弁何年雪合浦可迷旧日珠	『和漢朗詠集』「月」統理平
六一	千たひうつきぬたの音に夢さめて物思ふ袖の露そくたくる(四八四) ⑫ 八月九日正長夜千声万声無止時	○『白氏文集』卷十九「聞夜砧」 ○『和漢朗詠集』「擗衣」白居易
六六	秋更ぬなげや霜よのきりくすや影さむしよもきふの月(五一七) 13 春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時	○『白氏文集』卷十二「長恨歌」 ○『和漢朗詠集』「恋」白居易
六八	桐の葉もふみわけかたく成にけりかならず人をまつとなけれと(五三四) 14 梧桐一葉落天下皆知秋 15 春風桃李花開日 秋露梧桐葉落夜	○『群芳譜』 13に同じ
七〇	後土よまでことゝはむ水上はいかはかり吹みねのあらしそ(五五四) 16 追夜光多與園月 朝每声少溪林風	○『和漢朗詠集』「落葉」後中書王具平
七五	冬枯のもりの朽葉の霜の上におちたる月の影のさやけさ(六〇七) 17 霜露玩降木葉尽 脱人影在地仰見明月	未詳(「東坡」と傍書あり)
八八	たかき屋にのほりてみれば煙たつ民のかまとはにきはひにけり(七〇七) 18 五日一風十日一雨	○『論衡』是応

九三	<p>玉ゆらの露も涙もとまらずなき人こふる宿のあき風（七八八）</p> <p>⑬ 古郷有母秋風泪</p>	『新撰朗詠集』「行旅」源為憲
九四	<p>なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色は見えねと（八〇三）</p> <p>⑭ 林マ寝王の岨に巫山神女見えて願鶴 枕席いひて去而辞日妾在 巫山之陽 高丘之岨一旦為朝雲暮為行雨朝暮陽台下朝視之加宮 故為 立廟曰朝雲客</p>	『文選』卷十九「高唐賦并序」宋玉
一四六	<p>いつもきく物とや人の思ふらんこぬたくれの松風の声（一三二〇）</p> <p>21 松風入魂腦</p>	未詳
一五七	<p>いきてよもあすまで人はつらからしこのたくれをとほとへかし（一三二一九）</p> <p>22 旅館無人暮雨魂</p> <p>23 西出陽關無故人</p>	<p>19に同じ</p> <p>『王右丞詩集』「三體詩」 「送・元二使・安西」王維</p>
一七九	<p>有明の月の行ゑをなかめてそ野寺のかねは聞へかりける（一五二二）</p> <p>21 朝権若落野僧争在深禁半夜鐘</p> <p>⑯ 野寺訪僧 僧帯月</p>	<p>未詳</p> <p>『和漢朗詠集』「僧」鮑溶 『千載佳句』「春遊」</p>
一八七	<p>あさちふや袖に朽にし秋の霜忘れぬ夢を吹あらし哉（一五六四）</p> <p>26 往事渺望都似夢旧友零落半帰泉</p>	<p>『和漢朗詠集』「懷旧」白、 『白氏文集』卷十七「十年三月三十日別 微之於滄上」、十四年三月十一日夜、</p>

山里に契りし庵やあれぬらんまたれんとたに思はさりしを（二七五七）
 27 相違尽道休・官去 林下何曾 見一人

これを出典別に分類すると次の如くである。(番号は引用漢詩文の通し番号により、複数の番が出典として挙げられる場合には傍線を施した。)

- 論語・・・1、10
- 論衡・・・18
- 文選・・・20
- 王右丞詩集・・・23|
- 白氏文集・・・6|、12|、13|、15|、26|
- 千載佳句・・・25|
- 和漢朗詠集・・・6|、11|、12|、13|、15|、16|、25|、26|
- 新撰朗詠集・・・19|、22
- 放翁詩集『劍南詩稿』・・・2
- 山谷詩集・・・5
- 三体詩・・・8、9、23|、27
- 群芳譜・・・14
- 未詳・・・3、4、6、17、21、24

このうち『王右丞詩集』と『白氏文集』が出典の詩については、傍線を付してあるように、それぞれ『三体詩』と『和漢朗詠集』にも収載されており、原典の方ではなく簡便なこちらの方を出典とする可能性も高い。『聞書』に引用されている漢籍の種類は決して多くはないうえに、『王右丞詩集』や『白氏文集』を出典と認めないならばその数はさらに減少するが、ある特徴が見て取れるように思う。

一一

さて、注釈に際し、抄出歌の本説乃至は参考たる漢詩文を指摘するのは通常のことである。出典一覧表の引用漢詩文の通し番号に○印を付したものがそうである。

4も『聞書』では「一五四番歌」思ひたつ鳥はふるすまたのむらん馴ぬる花の跡の夕暮」の本説乃至は参考詩とし

て挙げられていると思われるが、出典未詳である。一方、『新古今和歌集』の諸注では参考歌として『千載和歌集』・春歌下・一二二番（出典は久安百首）の崇徳院歌を挙げている。

花は根に鳥はふるすに返なり春のとまりを知る人ぞなき（百首歌めしける時、暮の春の心をよませたまうける）

また、『和漢朗詠集』・閏三月にも藤滋藤の似た詩句がある。

花は根に帰らむことを悔ゆれども悔ゆるに益なし
鳥は谷に入らむことを期すれども定めて期を延ぶらむ

ところで、崇徳院歌について、和泉古典叢書『千載和歌集』では藤滋藤の詩句による表現と注し、岩波新日本古典文学大系も同詩句を参考に掲げている。しかし、『聞書』に引用されている4を含めて見比べてみると、崇徳院歌の「鳥はふるすに返なり」は、藤滋藤の詩句「鳥は谷に入らむ」よりも4の「鳥飯旧巢」の詩句に近い。4については未だ出典が判明しないので確かなことは言えないが、崇徳院歌の典拠である可能性さえあるのではないかと思われる。時代は下るが、『毛吹草』巻第二「世話 付古語」

に「はなはねにかへる とりはふるすにかへる」の句が採られている点からも、4乃至『毛吹草』の詩句を有する文献が存在していたと考えられるのではないだろうか。17、26、27も本説の指摘ではないが、同題や同じような内容の詩句を参考に掲げたものである。

それに対し、他の大部分の漢詩文は特別に掲げる必要性を認めないものが多い。例えば五三四番歌「桐の葉もふみわけかたく成にけりかならず人をまつとなけれど」では、然るべき本説『和漢朗詠集』「落葉」白居易は掲げておらず、「桐は初秋に落るものなり、一葉しくといふはみなきりの事也、古詩に」とに続けて14、15を掲げている。これは秋に桐の葉が落ちるのを詠んだ詩例として掲げたもので、14は特に傍線部「一葉しく」と両詩句に続く注文、

此哥ふみわけがたくといふは春秋の事也、此桐の一葉おつるよりとひやし侍らんと、たれをさだめて待とはなければどもさびしさのまゝに思ひくらし侍るに、もとよりとふ人もなく桐の葉ばかり落つもりて道もうづもれふみわけ侍らんやうもなし（以下略）

の「桐の一葉おつる」にこだわった解釈から引用したものと思われ、五三四番歌の注釈に特に必要とは思われな

いのである。1、10、18は何れも歌の内容が『論語』『論衡』の説く「道理」と適合しているという立場からの引用であつて、歌自体の理解のために特に必要とは思われな
いものである。

2、3、4、7、8、9、13、21、24は抄出歌と直接関係のない詩句を挙げたものである。

例えば2、3は、直前の注文「この哥さしたるふしも侍らねど心なき物に心をつけていへるきどく也、其ゆへは諸花の中にも梅は句をかんじ色をもてあそぶ物也、然間故人も色くくにさたし侍り、一放翁か詩に」と直後の注文「などととりくくにいへり」に明らかかなように梅について様々に詠むという例として挙げたに過ぎない。

また、二〇一番歌注に引用されている6、7、8、9については、これらの詩句の後に「古人はいづれも夜るの雨をおもしろき事にいひ侍り」と書かれている通り、ただ二〇一番歌と同じく夜の雨を詠んだ詩として掲げているに過ぎない。6は二〇一番歌の本説であるが、注文に特に断つてないので或いは意識的に本説の指摘をしたのではないのかもしれない。因みに本説を指摘する場合、例えば11では前後の注文は「古詩に」「といふ心を読む哥也」となっている。

こうしたわざわざ挙げる必要のない漢詩文を掲げる注釈方法は、石川常彦氏が『常縁口伝和歌（A類注）』の場合について「中世一般の注釈書の傾向としての術学的なまでの漢詩文・故事への依拠や語りすぎの傾向を見る」と述べられた通りであろう。

二

ところで、和歌の詠法や表現の理解にまで踏み込んで引用された漢詩文もある。

16は五五四歌「筏士よまでことゝはむ水上はいかばかり吹みねのあらしぞ」の注文、

落葉浮水といふ題なり、是は題をまはして説たる哥なり、ふとは意得がたき事也、上手の哥に如此事おほく侍り、（中略）詩にも減題二にて題にある字を減て作事あり、落葉詩に

追夜光多吳園月 朝毎声少溪林風

是も落葉といふ字侍らず

これに明らかのように、題を直接的に表現しないで婉曲に表現する「まはして詠む」詠法の詩の例として挙げられている。

また、22、23を引く一三一九番歌「いきてよもあすまで
ひとはつらからじこの夕ぐれをとほごとへかし」の注文、

人はといふは我事也、わが命もあすまではつれなく
ながらへがたし、命のうちこのゆふべをとへと切に
いひたる心あはれに幽なり、

おしむべき春をば人にいとはせて空だのめにやな
らんとすらん

是も人にいとはせてといへるは我事也、詩にも如此
いふこと侍り、旅館無人暮雨魂、此人といへるも我
事也、西出陽関無故人、此人と云もわがこと也、かや
うのたぐひ哥にも詩にもおほし

これは、「ひと」を「我事」と解釈する点が眼目で、その
詩例として22、23も挙げられているのであるが、久保田
淳氏が

「人」は恋人をさす。『聞書』に「人とは我が事也。我
が命もあすまではつれなくながらへがたし」と解す
るのは、「つらからじ」を「つれなからじ」の意に取
ろうとするので、強引な解釈である。従えない。

と述べておられる通り『聞書』の解釈は誤っている上に、
22、23も「人」の解釈を誤解して引用している。ただ、誤
解であるとはいえ、解釈に踏み込んだ詩例として22、23

が引用されているのは後述するような理由があるからで
はなかるうか。

既述の如く『聞書』に引用されている漢詩文は本説や
直接関係ないものも含め参考詩などの指摘というものが
殆どであった。そのなかで抄出歌の解釈や詠法にまで関
わって引用されているのは如上の16、22、23だけである
が、これは『無名抄』の影響ではないかと考えられる。

16を引く五五四番歌注は「まはして読んでいる点に
ついて述べているが、そもそも「まはして詠む」という題
詠の技法について最初に言及したのは『俊頼髓脳』であ
る。

大方歌をよまむには題をよく心得べきなり。題の文
字は三文字四文字五文字あるを限らず、よむべき文
字、必ずしもよまざる文字、まはして心をよむべき
文字、さへてあらはによむべき文字あることを、よ
く心得べきなり。心をまはしてよむべき文字をあら
はによみたるもわろし。たゞあらはによむべき文字
を、まはしてよみたるもくだけてわろし。かやうの
事は習ひ傳ふべきにもあらず。たゞわが心を得てさ
とるべきなり。

これを承けて『無名抄』にも次のように書かれている。

哥は題の心をよく心得べきなり。俊頼髓脳といふ物にぞ記して侍るめる。必ずまはしてよむべき文字、中くまはしてはわろく聞ゆる文字あり。

これらを始めとする歌学書を検討して田村柳壹氏が

『結題』における文字の詠法としては、究極のところ、cの「まはして心を詠むべき文字」(前掲『俊頼髓脳』の三行目を指す、稿者注)の問題が最も肝要なこととされ、後には「結題をばまはして詠むと言へり」(愚問賢注)「結題をばまはして詠むべし」(近來風鉢抄)などのように、「結題」と言えば「まはして詠む」とであるかのごとく記述されるに至る。

と述べておられるように、当時「まはして詠む」技法が題詠の詠法として非常に意識されていたということが『聞書』の注文の背景にもあると考えられるが、直接的には『俊頼髓脳』就中『無名抄』の影響ではないかと思われるのである。というのは、『聞書』は七〇八番歌注文に「俊頼口伝に・・・」と『俊頼髓脳』を引き、一一〇六番歌「かへるさの物とや人のながむらむ待夜ながらの有明の月」の注文末尾では「鴨長明新古今三首の名哥といひしはひとつの哥也」と『無名抄』の評を指摘しており、常縁が『俊頼髓脳』や『無名抄』に馴染んでいたことが知られる

からである。

それに、一三二九番歌注に証歌として引かれている「おしむべき春をは人に・・・」の歌も『無名抄』に取り上げられている点も付け加えられよう。

又同所にて、故因幡といひし女房、夏を契る恋と云ふ題にて、

惜しむべき春をば人に厭はせて空頼めにやならん
とすらん

とよめりしを、「よろし」など人々定め侍しほどに、或人云、「春をば人に」といへるや少しおぼつかからん。只『春をばわれに』といひたらば、確かにて勝りなんかし」と云ふ。是に同ずる人多く侍しを、俊恵聞きて、「無下に心劣りせらるゝ事をの給ふかな。『人に』といひたりとて他人とやは思ひたどるべき。『我に』といひては哥ことの外に品なく聞ゆるものを。哥は花麗を先とす。人をば知らず、をのれはたとひ難ありとも『人に』とよまん」とぞ申し侍し。

これは「人に」という和歌表現についての俊恵の見解を伝えているものでとても興味深い。また、当然この「人に」は「我に」の意であるが、上述のように『聞書』が一三二九番歌の「ひと」を「我事」に誤解して注釈している

のも、この『無名抄』の印象が非常に強かったからではないかと思われる。

このように、16、22、23が他の引用漢詩文とは異なり、和歌の詠法や解釈の補強という引用のされ方をしたのは、漢詩文の側に理由はなく、注文自体が『無名抄』の歌論に即した例を挙げようとした所為であると考えられるのである。

四

さて、以上は漢詩文の引用方法について見てきたのであるが、『聞書』の漢詩文引用の特徴はむしろ出典にあると思われる。『新古今和歌集』の注釈書でありながら、引用漢詩文二七例中未詳のもの六例を除くと、二一例中七例が『新古今和歌集』成立以降に伝来した漢籍から引用されているのである。これについて以下に述べたい。

第一章の出典別分類中◎印が付してあるもので、『放翁詩集』、『山谷詩集』、『三体詩』、『群芳譜』がそれである。17の詩は『聞書』に「東坡」と傍書されているものの、まだ出典を確認できていないので出典未詳に分類しているが、蘇東坡のものと確認できれば、これも数に入ること

になる。また、『群芳譜』は明の万暦年間に王象晉によって撰せられたもので、年代からして常縁がこれを見ていたはずはないので、もっと遡った文献の存在が推測されるが、今のところ確認し得ていない。したがって当面問題にするのは三文獻だけということになる。

この三文獻について解説されているものを、特に我が国への伝来を中心にして紹介したい。

『三体詩』は宋の周弼が編纂したもので、その伝来と影響について『日本古典文学大辞典』には、

渡来の始めは、『暁風集』に、南北朝時代の元弘二年（一一三三）という。中巖円月（東海一濶子）の講を濫觴とするもので、京都五山を中心に広まり、文龜二年（一五〇二）頃、「海内叢社諸童子不説無」といわれる程に盛行する。

とあり、『漢籍解題』には、

（我國）に傳はれるは、三體詩絶句鈔に、「此集を始めて講ずるは、妙喜菴の祖中巖和尚入唐してよりの事なり」といへば、中巖の傳へたるものなるべし、爾來講述甚だ盛に、其授受の系圖をみるに、中巖より義堂に、義堂より江西に、江西より瑞巖、九淵、村菴に、村菴より正宗、月舟に傳はれり、これ其傳承なり、

とある。

『山谷詩集』は『漢籍解題』に、

(作者) 宋の黃庭堅撰す、庭堅字は魯直、分寧の人、山谷と號す、…(我國) に傳來せるは時代詳ならざれども、蘇東坡の集と同時頃なる可し、足利氏の中葉より、五山僧徒の間に、東坡集に次ぎて行はれ、之を抄録、評註する者多し、釋萬里の帳中香の如き最も著る。

とあるが、同時頃という蘇東坡集の伝来は同じく『漢籍解題』に「字槐記抄に、仁平元年、宋商劉文冲東坡先生指掌圖、五代史記等を献納すること見ゆれば、當時或は渡來せしやもしる可からず」と記されている。因みに、仁平元年は西暦一一五一年である。

『放翁詩集』(『劍南詩稿』)は宋の陸游(号は放翁)の詩集である。一海知義氏は『陸游』の解説において次のように述べておられる。

わが国に放翁の詩が伝えられたのは、彼の死後まもない鎌倉から室町にかけての時代であるらしく、いわゆる五山版の放翁詩集が現存するという。その後、その後の消息を私は知らぬが、江戸時代も末期になると数種の選本が刊行されている。

これら三詩集は中国宋代に成立したものが禪僧によって日本にもたらされ五山で盛行したのであるが、中国本土における臨濟宗の一派と蘇軾(東坡)・黃庭堅との結びつきを勘案すれば、五山でこれらの詩集がもてはやされるようになったのも当然の帰結であろう。また、禪宗が外国の宗教なので言語習得に一所懸命になったことや當時禪宗に人氣が集まったので禪寺に入門するための選抜試験に詩作を課したことが中国語習熟能力及び作詩能力のある人材を集めることになって漢文学熱が昂じたということ、それが五山と上記漢詩集の結びつきに与っていると考えられるのである。

ところで、五山で流行していたこれらの詩集と常縁の接点がどこにあつて『聞書』に引用したのかと言えば、それは常縁を取巻く縁者に求められよう。上掲の解説中に見える江西、九淵、正宗は常縁の親族である。常縁を中心に東氏系譜を辿ると、伯父に江西竜派、叔父に慕哲竜攀、兄に南叟竜朝、弟に正宗竜統、息子に常庵竜崇などの五山僧がおり、東氏一門は詩文に名声を博していたのである。前述のように五山では漢詩文熱が高まつており、抄物と呼ばれる注釈書も様々作られたが、その中心である『三体詩』について見ると、正宗竜統の師である希世盛彦

(村菴)には『三体詩抄』があり、常庵竜崇には『三体詩絶句抄』がある。

このように、常縁の縁者には五山僧が多く、したがって五山で活発に行われていた漢詩文に興味を抱き影響を受けて、『聞書』にもそれを引用したのではないかと考えられるのである。

(注)

- 1 以下、『聞書』と略称を用いる。
- 2 『新古今集聞書』の引用は、荒木尚『幽齋本 新古今集聞書——本文と校異——』(九州大学出版会、一九八六年二月発行)による。
- 3 本文は、片野達郎・松野陽一校注『千載和歌集』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九三年四月発行)による。
- 4 本文は、大曾根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』(新潮日本古典集成、新潮社、昭和五八年九月発行)による。
- 5 上條彰次校注『千載和歌集』(和泉古典叢書8、和泉書院、一九九四年一月発行)
- 6 本文は、竹内若校訂『毛吹草』(岩波文庫、昭和一八年一二月発行)による。
- 7 この句の有力な存在証明になるかどうかはわからないが、これと全く同じ句が京都某寺で法語として掲示されているのを見たことがある。なお、出典を尋ねたが、不明ということであった。
- 8 脱点、濁点、傍線は稿者による。以下同じ。
- 9 『拾遺愚草古注(上)』(三弥井書店、昭和五八年三月発行)の「A類注」解説「四 注文内容」
- 10 『新古今和歌集全評釈』(講談社、昭和五二年六月発行)
- 11 本文は、佐々木信綱編『日本歌学大系 第一巻』(風間書房、昭和三二年三月発行)による。
- 12 本文は、久松潜一・西尾実校注『歌論集 能楽論集』(日本古典文学大系、岩波書店、昭和三六年九月発行)による。
- 13 「題——「結題」とその詠法をめぐって——」(和歌文学の世界第十集『論集 和歌とレトリック』、笠間書院、昭和六一年九月発行)
- 14 谷澤尚一執筆、岩波書店、一九八四年四月発行。
- 15 桂五十郎著、名著刊行会、昭和四五年八月発行。
- 16 『中国詩人選集二集 第八巻』(岩波書店、昭和三七年七月発行)
- 17 一九九二年十月三日〜六日、青山短期大学の書籍展覧会に五山版のこの詩集が出品されていた。『青山会文庫所蔵和漢書分類目録』中の「篠山鳳鳴高等学校 青山記念文庫書目」の「九四七、

増統陸放翁詩 九二二・二四 刊 五」がこれに該当するものと
思われる。

18 玉村竹二著『五山文学―大陸文化紹介者としての五山禪僧の活
動―』、四八頁。(至文堂、昭和四一年一月発行)

19 注18に同じ、一七三頁。

20 河村定芳著『東常縁』(東常縁顕彰会、昭和三二年三月発行、六
七頁)、井上宗雄「東常縁に関する基礎的考察―その生涯と歌
壇における地位と―」(『文学・語学』第18号)

21 注18に同じ、二二六頁。

22 『日本古典文学大辞典』「三体詩」の「注釈書」の項、注目参照。